様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月　 ４ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１７３８５

研究課題名（和文）タイにおける「実践研究者としての教員」の養成・研修に関する研究

研究課題名（英文）Educating "Teachers as Researchers" in Thailand

研究代表者
牧　貴愛（Maki, Takayoshi）

広島大学・国際協力研究科・准教授

研究者番号：８０６１０９０６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究を通じて、タイでは「実践研究者としての教員」の養成や研修が、法制度ならびに導入・実施のための基準や実施要項等を伴うかたちで整備されており、教育実習生がアクション・リサーチの報告書を完成させるに至っていることが明らかになった。他方、教育実習生の指導にあたる現職教員の資格要件としてアクション・リサーチの指導・助言ができる、アクション・リサーチの研究実績があるという基準が明示的に盛り込まれていないこと。また、現職教員がアクション・リサーチについての理解を深め、また実践に繋がるような研修機会が十分に整備されていないという課題も明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This study revealed that teacher education program in Thailand has been implementing 'teachers as researchers' concept into practice through enactment of related laws and guidelines. Moreover, student teachers has been extensively conducting action research throughout their teaching practicum and completed the action research report. However, cooperating teachers' abilities and skills and experience of action research is not clearly stipulated in the accreditation criteria, also there is little opportunity of learning action research for cooperating teachers.

研究分野：比較教育学、教師教育、タイ地域研究

キーワード：タイ　教師教育　国際情報交換　実践研究者としての教員　教員養成

１．研究開始当初の背景

タイでは、2009～2018 年までの 10 年間を「第２期教育改革」と設定し、教育・学習機会の保障ならびに教育・学習の質的向上をめざした教育改革を推進している。改革施策は、大きく、①次世代タイ人の育成、②「高度化」指向の教員養成・研修の整備、③教育機関・学習資源の改善、④教育管理・運営手法の改善、という４領域から構成されている。

研究課題を申請した当初、申請者は、上記②について、タイにおける「教職高度化」をめざした教師教育改革に関する研究（平成 24 年度～平成 26 年度科学研究費補助金　若手研究（B））の助成を受けて、教師教育改革施策の全体像を把握するとともに、個々の施策の意義と課題の解明を進めていた。また、上記の研究課題の遂行と時を同じくして、申請者は、教職課程の専任教員として「教職に関する科目」の講義担当はもちろんのこと「教職実践演習」全 15 回の設計・運用を担ったり、教員免許更新講習の講義を担当したりしていた。以上の教育実践を通して、申請者は、教職実践演習の趣旨や、平成 24 年 8 月の中央教育審議会答申に示された「学び続ける教員」像は、ステンハウスの「実践研究者としての教員（teachers as researchers）」に通じるところがあり、その養成・研修の在り方に、強い関心を抱くようになった。しかしながら、我が国における関連の研究は、頗る少ない。最近のものに限ってみると、兵庫教育大学教員養成カリキュラム改革委員会『教員養成と研修の高度化』（2014 年刊）の一部で取り上げられたり、隼瀬悠里「フィンランドにおける『研究に基礎を置く』教員養成の考察」（『日本教師教育学会年報』19 号、2010 年刊）により同国の事例が示されたりするにとどまっている。

翻って、申請者が主たる研究対象としているタイにおける「実践研究者としての教員」の養成・研修については、これまでの調査・研究により、次の３点について確認済である。すなわち、①教育専門職基準に「教授学習の改善に資する研究を遂行できる」という基準が盛り込まれていること。②教育専門職基準に対応した５年課程の教員養成カリキュラムでは、５年次の１年間にわたる教育実習時に、実習生が実習校においてアクション・リサーチに取り組み、その成果を研究論文としてとりまとめること。また、③アクション・リサーチの遂行に必要な研究手法等の習得をねらいとする科目が設けられていること、である。しかしながら、こうした問題関心に基づく国内外の先行研究は、申請者ならびに堀内孜氏による一連の研究蓄積を除き、また、英語やタイ語で書かれたものに目を移してみても管見の限り皆無に等しい。つまり、本研究課題は、ほぼ未着手の領域であると言っても過言ではない。申請者は、以上の学術的背景を踏まえて、本研究課題を設定した。

２．研究の目的

本研究の目的は、タイにおける「実践研究者としての教員（teachers as researchers）」の養成・研修の意義と課題について、制度と実態の両面から解明することである。

３．研究の方法

上記の目的を達成するために、次の４つの具体的研究課題の解明に取り組んだ。すなわち、①タイにおける「実践研究者としての教員」概念の受容過程、②教員養成におけるアクション・リサーチ関連科目の教授内容と指導方法、③教育実習生によるアクション・リサーチと指導体制をめぐる課題、④アクション・リサーチの効用に対する教育実習生ならびに現職教員の意識、の解明である。

具体的なタイ現地調査の概略は、次の通りである。

2015 年 7 月と 9 月の２回、タイ・バンコクを訪問し、現地の調査協力者との打ち合せを行うとともに、関連資料の収集を行った（タイ教育省各局ならびに大学図書館）。

2015 年 12 月に、タイ教育省高等教育局長、タイ全国大学長会議の長、国家教育試験機構、教員審議会事務局、バンコク都内の中等学校等を訪問し、関連資料の収集ならびに聞き取り調査を行った。

2016 年度ならびに 2017 年度は、初年度に収集した資料の分析を進めるとともに、後掲の発表論文の執筆ならびに国内外の学術会議において鋭意、成果発表を行った。

なお、具体的研究課題④アクション・リサーチの効用に対する教育実習生ならびに現職教員の意識については、研究関心を同じくする先行研究から得られた知見を手がかりに、2017 年度中に質問紙調査を実施する予定であったが、諸般の事情により実施が遅れている。

４．研究成果

先述の４つの具体的研究課題それぞれについては、次のような一定の知見が得られた。

（１）タイにおける「実践研究者としての教員」概念の受容過程に関しては、タイの教育発展に多大な貢献をなしたと讃えられる教師（以下、優秀教師）の性別、身分や家柄、学歴、顕著な業績、人柄などにみられる特質の解明という観点から研究を進めた。

分析の素材として用いた『Prawat Khru』（以下、『教師列伝』）は、タイ教員審議会が 1957 年以降、毎年「教師の日（１月 16 日）」に１冊発行する個々の優秀教師の伝記を綴った冊子であり、現在までに 60 冊が刊行済である。『教師列伝』は「教師の日」に催される式典において出席者に配布されるとともに、全国の学校の図書室等に送付される。

初めて編纂された『教師列伝（1957 年）』の内容を分析すると、同冊子に掲載されている優秀教師全 10 名は、全員が男性であること、氏名に「プラヤー」「プラアジャーン」「ク

ン」「ソムデット」「チャオプラヤー」などの位階勲等（bandasak）が付いたいわゆる「クンナーン（高等官）」であること、功績としてタイ語教本を編纂したり、タイ語教授のための学校を創ったりしたこと、といった特徴を有していることがわかる。これは、上座部仏教社会のタイでは、男性が出家することにより、文字の読み書きを習うこと、当時の優秀さが、身分や家柄などに強く左右されていたこと、当時、国民形成ないし国民統合の観点からタイ語教育が重視されていたこと、を示している。

以上の諸特徴に見られる経年的な変化について、1957 年から 2017 年の間に発行された 60 冊の『教師列伝』の内容を分析した結果、次の事柄を指摘しうる。なお、1957 年から 1996 年までは１冊あたり 10～16 名、1997 年以降は 20 名強が掲載されている。

第一に、優秀教師として掲載されている女性は、1957 年から 1997 年まで、一貫して半数以下であること。女性の比率が２割を超えた年を列挙すると、1972 年、1978 年、1982 年、1983 年、1986 年、1987 年、1991 年、1993 年、1995 年、1996 年と断続的である。しかしながら、2001 年以降は２割以上を維持している。

第二に、位階勲等が付いた人物は、1957 年から 1978 年頃まで、ほぼ一貫して半数以上であり、1979 年以降は、３、４割程度にとどまっていること。これは、1970 年代に、学生運動などを通して民主的な国家形成を目指した動きが加速したことと関連しているとみることができる。ただし、位階勲等は「下賜姓」へと置き換えられた経緯があり、この点については更なる分析が必要である。

第三に、掲載されている人物の功績は、従来のタイ語教育に関わる事柄から、舞踊、農業、学校経営など、様々な分野にわたっていること。これは、タイにおける学校教育の発展や、教職の大衆化に伴う変化であるとみることができよう。

第四に、1957 年版では、当該人物を形容する言葉として「メーター・ガルナー（慈悲と思いやり）」「プラクン（恩恵）」が多く用いられている。これらは上に立ち強い立場の人が、自分より下の人に思いやりをもって振る舞うといったタイの伝統的リーダーシップスタイルを示すものである。他方で、1983 年版では「カヤン（勤勉）」「アオジャイサイ（親身になる）」「ガラヤナミット（良友）」が用いられるようになり、2001 年には「クワーム・ラッピチョープ・スーン（強い責任感）」「マヌサヤサンパン・ディ（良好な人間関係）」「オットン（忍耐）」などが用いられるようになった。これは、教師と児童・生徒間の関係が、従来の垂直的な関係から徐々にフラットな関係へと変化してきたことを示しているとみることができる。

（２）教員養成におけるアクション・リサーチ関連科目の教授内容と指導方法については、調査対象大学の教育学部で開講されている教育研究法関連科目のテキストの収集を行うとともに、教育実習生が取り組んだアクション・リサーチの報告書を収集した。とくに、アクション・リサーチの報告書の内容分析に取り組んだ。具体的には、バンコク都内に所在するシーナカリンウィロート大学教育学部初等教育専攻の教育実習生 60 名（2014 年度）のアクション・リサーチの研究題目を取り上げ、その特徴を考察した。

研究題目に表れた教科を見ると、タイ語 27 件、算数 26 件、社会４件、その他３件であった。教科毎の研究題目に見られる類似ならびに差異に注目すると、次のようなことがわかる。

第一に、タイ語 27 件の研究題目は、タイ文字の読みを取り上げたものが６件、書きが 15 件、慣用句の教授法が６件である。最も多く取り上げられているタイ文字の書きに関する研究では、単語を正確に綴ることをねらったワークシートを作成し、その効果を測定したものが多い。

第二に、算数 26 件の研究題目は、四則計算といった数と操作が 16 件、幾何が４件、教授法が４件であり、教授法のうち２件は TAI（Team Accelerated Instruction）や STAD（Student Teams-Achievement Divisions）といった協同学習をテーマとしていること。

第三に、社会４件の研究題目は、４件中２件がマインド・マップを用いた授業を行っており、その他の２件は、ワークシートの開発、ピア・ラーニング法をテーマとしていること。

第四に、その他３件の研究題目は、宿題提出の有無や授業中の発言回数を得点化する手法を導入し、その前後に見られる児童の態度等の変化を解明していること、である。

以上の研究題目の分析から、次の２つの特徴を指摘することができる。研究題目は、タイ語、算数が大半を占めていること。ワークシートを用いた授業改善が試みられていること、である。

（３）教育実習生によるアクション・リサーチと指導体制をめぐる課題については、教員養成課程の認定基準に盛り込まれている具体的内容を精査した。教員養成課程の最終年次（５年次）に、教育実習生が取り組むアクション・リサーチの指導体制は、大学教員２名（教職に関する科目の担当教員ならびに教科に関する科目の担当教員）ならびに教育実習校の指導教員１名といった３者が、指導・助言を行うものであることとされている。大学教員２名は、教育実習中ならびに夏期休業中等に大学で開催するリフレクション・セミナー等の単発的な機会を通じて、教育実習生の指導にあたっている。他方、教育実習校の指導教員は、日常的に教育実習生の指導にあたっており、当然のことながら大学の指導教員に比べて、教育実習生との接触が多く、また、アクション・リサーチの問題・課題設定の文脈を共有しているという点で、非常に重

要な役割を担っている。この点に関連して、「実践研究者としての教員」の養成が、どの程度、教員養成課程認定制度によって担保されているのかを教育実習校の指導教員に関する評価指標に絞って検討すると次のようなことが明らかになる。

第一に、教育実習生の指導教員の基礎的要件としては、①学士以上の学位を有していること、②３年以上の教育経験を有すること、③教職の使命、意義を深く理解していること。

第二に、教育実習生の指導教員が備えるべき資質・能力としては、①教育実習の目標、プロセスを理解していること。②「ピア・コーチング（kalayanamit nithet)」の技術を身につけていること。③専門職として、また倫理規程に沿った「品行の手本（baep yang thi di)」として自らを律していること。④教員養成に関わる様々な関係者との協力・連携を通して教育実習を運営できること。

第三に、教育実習校に勤務する教員に求められる条件としては、①教授学習の改善を念頭において様々な情報を収集する姿勢を持っていること。②教授学習の改善に資する学習に取り組んだり、研究を遂行したりすることができること。③問題を分析したり、解決したりすることができること。ただし、この評価指標は、教育実習生の指導にあたる指導教員に限ったものではなく、教育実習校に勤務する教員全体に関するものである点には留意が必要である。以上から、教育実習校の指導教員には、アクション・リサーチの指導・助言に直接関係する資質・能力ないし力量は求められていないことがわかる。

以上の具体的研究課題の解明に取り組んだ結果を総括し、タイにおける「実践研究者としての教員」の養成・研修の意義と課題をまとめると次のようになる。

意義としては、タイにおいて「実践研究者としての教員」の養成や研修が、法制度ならびに導入・実施のための基準や実施要項等を伴うかたちで整備されたこと。また、実際に、教育実習生がアクション・リサーチの報告書を完成させるに至っていること。

他方、課題としては、教育実習生の指導にあたる現職教員の資格要件としてアクション・リサーチの指導・助言ができる、アクション・リサーチの研究実績があるという基準が明示的に盛り込まれていないこと。また、現職教員がアクション・リサーチについての理解を深め、また実践に繋がるような研修機会が十分に整備されていないこと、である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　７　件）

（１）牧貴愛「タイにおける近代的学校教育制度形成の一断章」『バンコク日本人商工会議所　所報』No.670、2018 年２月、42～46頁。【依頼論文】
（２）Maki, Takayoshi. and Gondwe, Foster., “ Comparative policies on Educating Teachers as Researchers: Cases of Japan, Thailand and Malawi, ” *UKFIET Abstract Book*, 2, 2017. 【査読有り】
（３）Maki, Takayoshi., “What makes a Good Teacher?: Content Analysis of Prawat Khru. ” *13th International Conference on Thai Studies Abstract Book*, 530, 2017.【査読有り】
（４）Gondwe, Foster. and Maki, Takayoshi., “Comparative Analysis of Professional Development of Teacher Educators: Cases from Japan, UK, USA and Malawi.” *Re-thinking Teacher Professional Education: Using Research Findings for Better Learning 61th World Assembly ICET 2017 Book of Abstracts*, 23, 2017. 【査読有り】
（５）牧貴愛「第６章　タイの大学入試における格差是正措置」小川佳万編『アジアの大学入試における格差是正措置（高等教育研究叢書 135)』69-82、2017。【査読有り】
（６）牧貴愛「タイの大学入試制度―『分を知る』社会における公平性―」『大学教育論叢』２、65-79、2016。【査読有り】
（７）牧貴愛「タイにおける優秀教師群像(2)―『Prawat Khru（教師列伝)』の内容分析―」『国際開発学会第 27 回全国大会報告論文集』1-4、2016。【査読有り】国際開発学会優秀ポスター発表賞受賞。

〔学会発表〕（計　11　件）

（１） Maki, Takayoshi., “ Teacher's Responsibility or Parent's Right?” Japanese Studies Association of Thailand 11th Annual Conference (November 23, 2017: Khon Kaen University, Thailand). 【招待講演】
（２）牧貴愛「タイの教育発展と日本語教育」第 3 回熊本県立大学日本語教育研究室 「世のなごみ」国際会議 “人類の地平を越えて”, (2017 年 09 月 16 日、熊本県立大学日本語教育研究室)【招待講演】
（３）Maki, Takayoshi. and Gondwe, Foster., “ Comparative policies on Educating Teachers as Researchers: Cases of Japan, Thailand and Malawi, ”UKFIET: Learning and Teaching for Sustainable Development: Curriculum, Cognition and Context(September 5, 2017:The University of Oxford Examination Schools, High Street, Oxford, UK.)【査読有り】
（４）Maki, Takayoshi., “What makes a Good Teacher?: Content Analysis of Prawat Khru. ” 13th International Conference on Thai Studies: Globalized Thailand? Connectivity, Conflict, and Conundrums of Thai Studies. (July 16,2017: Chiang Mai,

Thailand)【査読有り】
（５）Gondwe, Foster. and Maki, Takayoshi., “Comparative Analysis of Professional Development of Teacher Educators: Cases from Japan, UK, USA and Malawi.” Re-thinking Teacher Professional Education: Using Research Findings for Better Learning 61th World Assembly ICET(June 28, 2017: Czech, Brno) 【査読有り】
（６）牧貴愛「タイ教師教育の課題と展望」教職員支援機構国際連携チーム勉強会（2017年5月29日、（独）教職員支援機構次世代型教育推進センター）【招待講演】
（７）牧貴愛「タイにおける優秀教師群像(2)―『Prawat Khru（教師列伝)』の内容分析―」国際開発学会第27回全国大会(2016年11月26日、広島大学)。【査読有り】国際開発学会優秀ポスター発表賞受賞。
（８）牧貴愛「タイにおける優秀教師群像―『Prawat Khru（教師列伝)』の内容分析―」日本教師教育学会第26回研究大会（2016年9月17日、帝京大学）
（９）牧貴愛「タイにおける『実践研究者としての教員』の養成」日本教師教育学会第26回研究大会（2015年9月20日、信州大学）【査読無】
（10）牧貴愛「タイにおける教員養成課程認定制度―認定基準の検討を中心に―」日本教育学会第74回大会(2015年8月30日、お茶の水女子大学)【査読無】
（11）Maki, Takayoshi. “Teachers as Lifelong Learners: Recent Teacher Education Reform in Japan,” 2015 Annual Symposium Development Research Forum Phase II(July 15, 2015: Hotel Cambodiana, Phnom Penh, Cambodia) 【査読有り】

〔その他〕
ホームページ等
タイにおける「実践研究者としての教員」の養成・研修に関する研究
https://researchmap.jp/makithai/kaken2015-2017/

６．研究組織
(1)研究代表者
牧　貴愛（MAKI TAKAYOSHI）
広島大学・大学院国際協力研究科・准教授
研究者番号：80610906